

# 黒べこの郷にて、ゆとりある家族経営 肉用牛肥育経営を実現

阿部 修二（肉用牛肥育経営・山形県川西町）

## 地域の概要

川西町は、県南部、米沢盆地の中央部に位置し、南西は丘陵地、北東は平坦地からなる、四季折々の美しい自然に恵まれた地域である。

農業は稲作が盛んで、農業産出額の過半数を占めている。また、畜産では、肉用牛、乳用牛、養豚農家があり、中でも肉用牛経営が畜産の中心となっている。



(写真1)阿部修二氏の家族

## 経営・活動の推移

阿部修二氏は平成17年に51歳で勤めていた福祉施設を辞め、JA所有の牛舎を借りながら、肥育牛18頭の飼育を開始した。

平成19年には54頭規模の牛舎を新築し、初めて自分の牛舎を持った。その後、平成22年には56頭規模の2棟目の牛舎を、更に平成26年には40頭規模の3棟目の牛舎を新築し、現在は140頭まで増頭した。3棟目の牛舎にはバンクリーナーを設置することで、省力化を図っている。

また、平成18年、「黒べこの郷粗飼料・和牛生産組合」を組織し、副会長を務めている。

## 経営管理・生産技術の特色

### 【個体に合わせた飼料給与】

飼料は朝に給与する分を前日の夕方に、夕方に給与する分をその日の午前中に、1牛房分ずつプラスチックコンテナに入れて準備する。

飼料は個体ごとの観察や発育を基に配合しており、配合飼料、単味飼料、ビタミン剤、生菌剤等を微調整している。



(写真2)配合した飼料を入れたプラスチックコンテナ

(表1)経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	経営・活動の内容
平成17年	肉用牛肥育	18頭	・勤めを辞めて、JA所有の牛舎を借りながら、念願であった肉用牛肥育経営を開始する。 ・青色申告を実施。
平成18年	肉用牛肥育	36頭	・「黒べこの郷粗飼料・和牛生産組合」を組織し、粗飼料生産に係る共同作業を始める。 ・山形県畜産協会経営診断を開始。
平成19年	肉用牛肥育	64頭	・54頭規模の牛舎を新築し、初めて自分の牛舎を持つ。
平成20年	肉用牛肥育	92頭	
平成21年	肉用牛肥育	92頭	・税理士に経理を依頼。
平成22年	肉用牛肥育	92頭	・56頭規模の2棟目の牛舎を新築する。
平成23年	肉用牛肥育	120頭	
平成24年	肉用牛肥育	120頭	・「米沢牛」の定義変更のため、去勢の導入を辞め、メスのみの肥育となる。
平成25年	肉用牛肥育	130頭	・「黒べこの郷粗飼料・和牛生産組合」に東京出身である1名の組合員が新たに加入する。
平成26年	肉用牛肥育	130頭	・3棟目となるバンクリーナーを備えた40頭規模の牛舎を新築する。
平成29年	肉用牛肥育	140頭	・「黒べこの郷粗飼料・和牛生産組合」に福島県南相馬市出身である1名の組合員が加入する。

### 【導入から出荷までの記録】

導入した子牛の特徴、病気等の治療履歴、出荷時の枝肉結果等について、全ての牛の記録を手帳に残している。経営を始めた平成17年から今日まで記録してきた手帳は現在4冊目となり、それらの記録を次の牛の導入や飼養管理に反映させることで、技術改善に大いに役立っている。

### 【ストレスのない牛舎環境づくり】

阿部氏は、飼養している牛を「牛さん」と呼び、出荷するまで牛がいかにか快適に過ごせるかをモットーにしている。牛の気持ちになって、ストレスのない牛舎環境づくりや飼養管理を行うよう心掛けており、いくつか実践していることがある。

1つ目は、管理しやすい従順な牛を育てることである。導入牛の粗飼料給与や手入れは、妻が担当している。手入れは、声を掛けながら行うことで人間への慣れが早くなり、管理しやすい従順な牛になる。

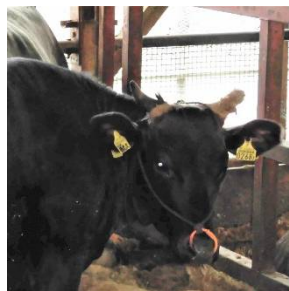
2つ目は、ブラッシング・ストレッチ法である。これは、かつて馬を扱っていた経験を基に阿部氏が発案した。方法は、大きな熊手や竹ぼうきで牛の背中を搔いたり押ししたりしながら血行を良くし、牛が伸びをすることでストレッチになるというもの。こうすることで、ストレスを和らげるとともに、肉質の改善及び幅をもたせることに繋がる。同時に、牛に触れることで体調がわかり、病気やけがの早期発見もしやすい。



(写真3) ブラッシング・ストレッチ法

3つ目は、牛舎内でラジオを流すことである。音のある環境に慣れさせることにより、少々の音では牛が驚なくなるため、ストレスが軽減する。

4つ目は、除角や削蹄の際、極力牛にダメージが無いように気を使うことである。除角



(写真4) 除角した牛の角カバー

は強い牛のみ行うことにしており、除角する際も、血が出ないように角の先端のみ切り、包帯でカバーをする。爪も軽く切る程度にし、自分が仕上げたい体型に育てている。

5つ目は、週に1回飼料の給与を半日休む「ヘルシーデー」を設けることである。これは、22ヶ月齢以降の牛に対して行うもので、食欲改善、ズル対策を目的としている。また、この日にビタミンAを3万～6万IU程与えるのだが、ビタミン剤を飼料に混ぜることで経口投与によるストレスをなくしている。

### 【血統にこだわらない子牛導入】

子牛を導入する際、尾枕の無い小さな牛を選ぶことで、価格を安く抑えている。しかしながら高い肥育技術により、BMS平均と枝肉kg単価が高い、良い牛に仕上げているため、個人ブランドとして購買者に高い評価を得ている。

## 地域貢献、生活の視点

### 【地域畜産振興の取り組み】

阿部氏は、「川西町肉牛部会」の部会長として平成23年度～平成30年度まで勤め、また、「黒べこの郷粗飼料・和牛生産組合」の副会長として平成19年から現在まで勤めるなど、地域の畜産振興に積極的に取り組んでいる。「黒べこの郷粗飼料・和牛生産組合」は、肉用牛肥育経営が3戸、繁殖経営が3戸、一貫経営が1戸の計7戸からなる生産組合である。組合員は、30代が2人、40代が3人、60代が2人いる。

### 【農業後継者の育成】

黒べこの郷粗飼料・和牛生産組合は、組合員の後継者を含め新規就農者の育成に積極的に取り組んでおり、組合員の中には県外から移住し、就農した者もいる。一人は、米沢牛生産を始めようと、東京から身一つで川西町にやって来た。彼は、半日役場で働き、半日農場で実習することになり、その実習先として依頼を受けたのが阿部氏である。実習の後、彼は独立し肉用牛肥育経営を始めることになった。もう一人は、東日本大震災の影響で福島県南相馬市から移住して来た人で、当生産組合に加入し肉用牛繁殖経営を始めている。

また、阿部氏は、山形県が総称山形牛の生産拡大を図るため「やまがたの和牛増頭戦略事業」の一環として実施している「和牛塾」で講師を務めるなど、県内の担い手育成に貢献している。

更に農村地域研修として、平成26年にキャンマの留学生2名、平成27年にガーナ等の

留学生2名を受け入れ、彼らに農業や地域について幅広く知ってもらうことにも協力した。

#### 【組合内一貫生産の取り組み】

黒べこの郷粗飼料・和牛生産組合の繁殖農家と肥育農家が連携し、家畜市場を通じて組合員の生産した子牛を導入することで、組合内一貫生産を行っている。肥育農家が枝肉情報を繁殖農家に提供し、繁殖農家はその情報を基に繁殖牛の更新を行うことで、より高品位の米沢牛生産に繋がる。平成25年には組合生産牛の4、5格付け割合は100%であった。

#### 【地元生まれの肥育牛で共進会へ】

阿部氏は肥育牛の中でも特に、地元で生まれ育った牛を積極的に枝肉共励会や共進会に出品している。これまで、平成22年第51回米沢牛枝肉共進会でチャンピオン(1位)を、平成26年全国肉用牛枝肉共励会で優秀賞1席(2位)を取るなど、好成績を収めることで米沢牛ブランドのPRに尽力してきた。

#### 【地元住民・小学校への牛肉提供】

川西町では、毎年9月上旬に「地酒と黒べこまつり」を開催している。阿部氏もこのまつりで牛肉を提供しており、町内産の牛肉を地元の人たちに食してもらっている。また、町内それぞれの小学校給食にまつりで使用した牛肉を提供し、子供たちに和牛の美味しさを体験してもらうことで、地域の食育にも携わっている。

#### 【県の給与試験、実証事業へ協力】

阿部氏は、山形県が行っている給与試験や実証事業を通して、県の畜産振興に携わっている。

山形県農業総合研究センター畜産研究所が実施している飼料用米の給与試験において、阿部氏は現在、全ての牛に飼料用米を給与し肉質の改善を図っている。

また、山形県置賜総合支庁産業経済部農業技術普及課から依頼を受け、平成30年から耕畜連携による子実用とうもろこし自給実証事業に参加している。現在、約40aのとうもろこしを栽培し、加工方法を検討しながら給与試験を行っている。

#### 【堆肥を活用した資源循環型農業】

川西町には第三セクターで運営されている「ランポートたまにわ」という堆肥センターがある。阿部氏も活用しており、自分の牛舎から出る堆肥の9割を堆肥センターに提供している。堆肥センターには10人の畜産農家が堆肥を提供しており、できあがった完熟堆肥は地元の米、畑農家が利用している。以前に比べ組合員と飼養頭数が増加したが、堆肥セ

ンターのおかげで糞尿の問題は発生していない。

一方、阿部氏の牛舎から出る堆肥の1割は地元の稲作農家に提供しており、稲わらとの交換を行っている。現在は6haの水田に堆肥を提供しており、今後は規模拡大を検討している。

#### 【家族がやりがいをもって経営に参加】

肥育経営を始めた当初は、阿部氏が一人で牛の世話をしていた。自分の牛舎を建て、牛を増頭したことを機に妻が経営に参加しており、牛の飼養管理と経理を担当している。また、現在では長男も会社を退職し、経営に参加している。

家族協定を結び、賃金の支払いや休日の確保することで、家族全員がやりがいを持って経営に参加できる環境を整えている。また、時間を見て、家族でゴルフや競馬の観戦、海へ釣りに行くなど余暇を一緒に楽しんでいる。

### 将来の方向性

#### 【『ゆとりある肉用牛肥育経営』の実現】

阿部氏は、自分の足で市場に赴き、自分の目で好みの牛を選び、育て、感謝の気持ちを持って出荷するまでの、一連の「牛飼い」そのものを楽しみとしている。そのため、今後も人を雇って大規模な経営を行うことは考えておらず、家族経営でまかなえる範囲内の150頭規模で経営していく予定である。また、省力化を図るために、バンクリーナーの設置を検討している。

#### 【今後の経営計画】

単価の安いふすま、ビール粕、膨潤処理飼料用米の給与方法を再度検討し、購入飼料費のコスト軽減に取り組んでいく。

更に、出荷先に応じた飼養管理を行い、販売価格を上げていこうと考えている。現在、阿部氏が出荷しているのは、米沢食肉公社と東京食肉市場である。しかしながら、この2か所では冷蔵庫に保管される日数が異なるため、筋肉中のグリコーゲン状態が変わってしまう。そのため、出荷先に合わせて飼養管理を変えることで販売価格の上昇を目指していく。